



# 続・大学の 奈良ガイド

## 第50講

# 魂よ、海に還れ

講師 田中希生  
(奈良女子大学助教)

父・民俗学者、折口信夫。  
海に死者の他界があると考えた。  
息子・春洋、硫黄島で戦死。  
若き魂は他界には行けない。  
彷徨う靈魂に安寧の地はあるのか。

■矛盾を超えた普遍性  
折口信夫の学問

神こゝに 敗れたまひぬ。  
しづかなる青垣  
山も よるところなき  
國びとの思ひし神は、  
大空を行く飛行機と  
おほく違はず  
信薄き人に向ひて  
恥ぢずるむ。敗れても  
神はなほ まつるべき

自らを近世国学の系譜の末  
につらねた折口信夫(1887  
〜1953)は、大戦に最愛  
の養子を失った悲しみのなか  
で、神の行く末を案じていた。  
西欧の革命がニーチェのいわ  
ゆる「神の死」をもたらした  
のに対して、日本における近  
代革命―すなわち明治維新―  
は、神を必要とした革命だっ  
た。このアポリアにこそ、い  
まだに誤解や偏見に満ちた日

■国土にあり子孫を守る魂と  
国土を去り波間に憩う魂と

人間にとって死は、東の間  
の生よりもずっと長い時間を  
占有し、悠久に等しいこの人  
間独自の時間世界に君臨する  
神は、死にかかわってこそ神  
である。神を課題の中心に据  
えた近世国学を受け継いだ近  
代民俗学が、信仰を問題にす  
るのは歴史の必然であり、た  
とえば折口の師のひとりであ  
る柳田國男の学問の行き着く  
先は氏神信仰や祖霊信仰だっ  
た。晩年の折口が課題にした  
のも、やはり死者の魂のゆく

えである。  
柳田はこういつていた。

私がこの本の中で力を入れ  
て説きたいと思う一つの点  
は、日本人の死後の観念、  
すなわち靈は永久にこの国

土のうちに留まって、そう  
遠方へは行ってしまわない  
という信仰が、おそらくは  
世の始めから、少なくとも  
今日まで、かなり根強くま  
だ持ち続けられているとい  
うことである。：死んでも  
死んでも同じ国土を離れず、  
しかも故郷の山の高みから、  
永く子孫の生業を見守り、  
その繁栄と勤勉とを顧念し

ているものと考えだしたこ  
とは、：限りもなくなつか  
しいことである。(「先祖  
の話」)

中央や平地を占拠する豊か  
な者に対して、周縁や山間部  
に逃れた貧者に親しげな眼差  
しを向ける柳田の魂は、いま  
だこの国土に、とりわけ山中  
に存在している。

それにひきかえ、稀人<sup>まれびと</sup>や  
「ごろつき」といった流れ者た  
ちに親しい折口の魂はどうか。

日本人の場合、海を背景と  
する地域に長く住み、其後  
も又、ある部分では、海の  
生活を続けたのだから「海」  
に他界がないとすることは、  
我々の採らうと思はぬ方法  
である。其と同時に、海を

離れて山野に住んだ時期の  
伝承ばかりを持つと思はれ  
る日本人だから、高天原他  
界説が正しいと言ふのも、  
単に直感にのみ拠つてゐな  
いだけに信じた気が深く  
動くが、此として日本国家以  
前・日本来住以前の我等の  
祖先の生活を思ふと、簡単  
に肯ふことは出来ない。  
(「民族史観における他界  
観念」)

となつて、いつまでもこの国  
土に残り続ける。たとえば、  
彼の最愛の息子、戦死した春  
洋のように。

■戦死した我が子を求め  
国土を彷徨う親の魂

折口における神への祈りと  
は、わけてもこの未成靈を完  
成に導き、他界へと還すため  
のものである。つまり国土に  
さまよう靈魂の正体は、子で  
はなく、子を失って此土に残  
された親の悲しみそれ自体な  
のである。事実、大戦におけ  
る数多の若者の死は、いまだ  
にわれわれ日本人の心残りとな  
つて、醜いイデオロギー的  
分裂を招いている。いかにし  
て、戦死した若者たちの魂を  
完成させ、海に還すのか。も  
し折口の魂がこの国土にいる  
としても、それは春洋のいる  
はずの海を求めてさまよつて  
のことである。



ほす>きに タクもひくき 明日香のや  
わがふるざとは 灯をともしけり  
飛鳥坐神社にある折口の歌碑。彼にとって故郷もまた、旅の途次にあった

流れ者にこそ日本人の中心  
をみた折口は、この狭い島国  
を永久にとどまるべき土地と  
みななかった。この大和でさえ、  
旅路に東の間の休らいをもた  
らず飯の宿りにすぎない。む  
しろふたたび流れ者として波  
間に漂うことこそ、魂の本来  
のありかたなのだ。だから彼  
は、死者の魂は完成に至って  
国土を去り、他界に還ると考  
えた(「人間は死んだ後、完  
成した靈魂ばかりが、此土の  
人のためを思ふものとなつて  
他界にゐる」同)。ここでの  
問題は「完成」である。完成  
しない「未成靈」、すなわち  
若くして死んだ者たちの靈は、  
残された年寄りどもの心残り

(講師紹介)  
田中希生 / たなかきお  
京都府出身。現在奈良女子  
大学文学部助教。専門は日  
本近現代史。著書に『精神  
の歴史』(有志舎)。  
ひとこと：言葉を発すれば文学  
が、歩けば歴史が、考えれ  
ば哲学が生まれます。人文学  
は、生きていかざり避けて  
通れぬもの。精進の日々です。